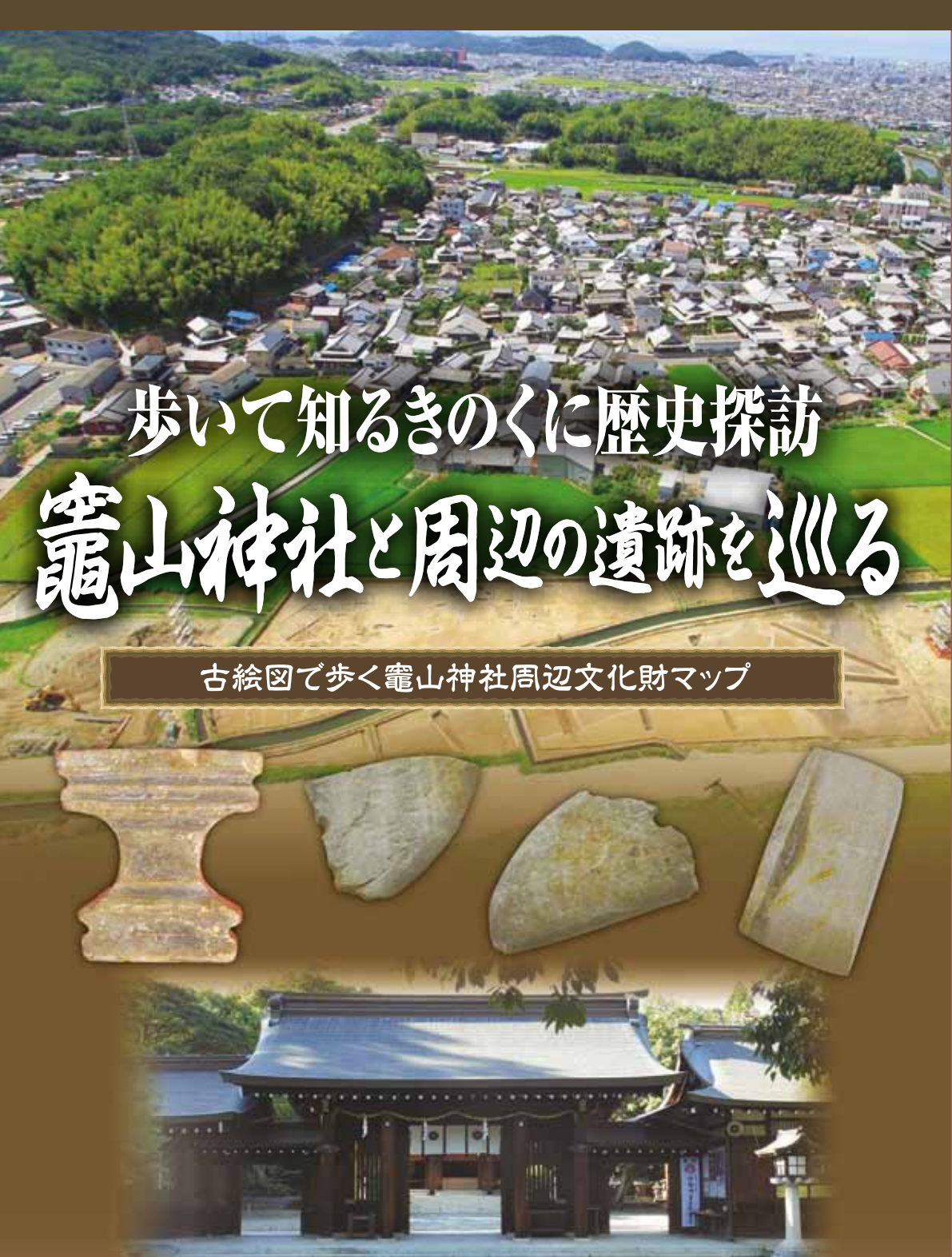
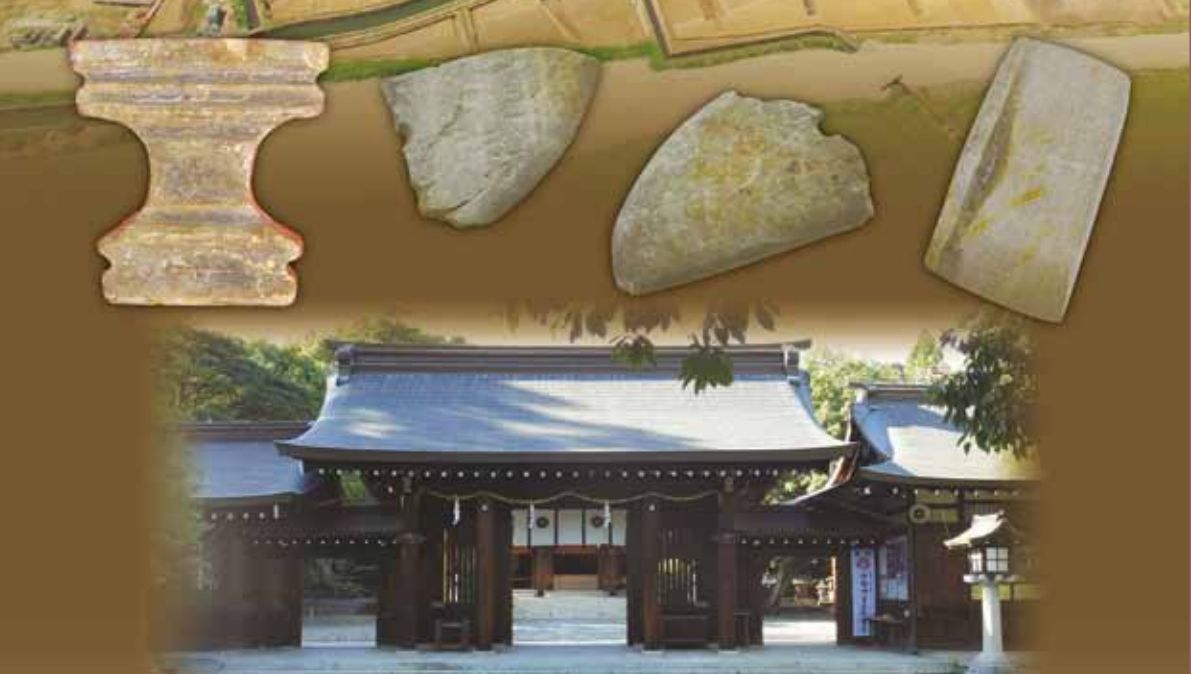




歩いて知るきのくに歴史探訪 竈山神社と周辺の遺跡を巡る

古絵図で歩く竈山神社周辺文化財マップ

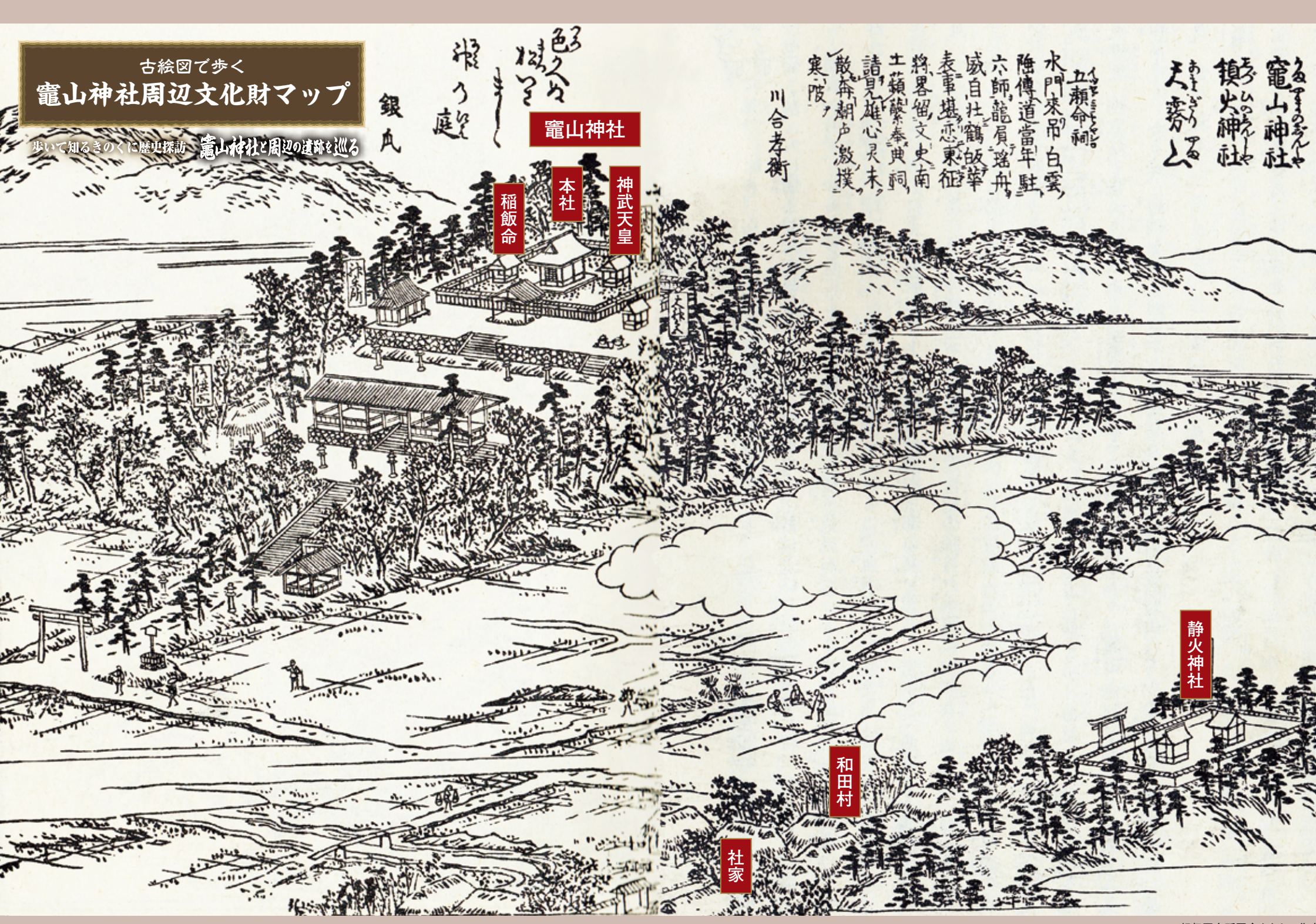


上段左：坂田遺跡出土 琴柱形石製品
上段中央：和田遺跡（第2次）出土 石庖丁
上段右：和田遺跡（第1次）出土 小型石斧
下段：竈山神社神門

竈山神社は、和歌山市和田に所在しています。和田と周辺の坂田・田尻を含めた地域は三田地区と呼ばれ、和歌山市と合併する昭和15年(1940)まで三田村として存在していました。

三田地区のなかでも、和田・坂田には多くの遺跡が存在していますが、大規模な発掘調査は行われていませんでした。近年の大規模調査によってこの地域の昔の様子がわかるようになってきました。竈山神社周辺の独立丘陵上には、多くの古墳が築かれており、中でも竈山神社の北側に隣接する竈山神社古墳(竈山墓)は和歌山県下唯一の陵墓として宮内庁により管理されています。

竈山神社の所在する三田地区には数多くの文化財が存在しています。近年、三田地区やその周辺では道路工事などに伴う発掘調査が多く行われています。「古絵図で歩く竈山神社周辺文化財マップ」では、三田地区での発掘調査成果を中心に、竈山神社と周辺の遺跡を紹介します。江戸時代の古絵図をもとに、竈山神社と周辺を歩いてみましょう。



紀伊国名所図会をもとに作成



竈山神社 社殿

『延喜式』(927年)にもその名が記されるほど古くからこの地に鎮座していました。式内社の社格は官幣小社であり、祭神は神武天皇の兄にあたる彦五瀬命です。天正13年(1585)に羽柴(豊臣)秀吉が根来寺等を伐つために行った紀州攻めの際に、社地と領田は没収され、社殿をはじめ宝物・古文書など一切を失いました。その後、慶長5年(1600)に紀伊国に入った浅野幸長が小祠を再建し、寛文9年(1669)に初代紀伊藩主の徳川頼宣により社殿が再建されました。

近代社格制度のもとで、明治14年(1881)に村社に定められ、同18年(1885)に官幣中社に、大正4年(1915)には官幣大社に昇格しています。村社から官幣大社にまで異例の昇格をした唯一の神社となります。現在の社殿は昭和13年(1938)に造営され、その後、屋根を銅板に葺き替えるなどの修築を行っています。『紀伊国名所図会』(江戸時代後期)を見ると丘陵の上に社殿が建てられていますが、現在は山裾に社殿が移されています。絵図の左下にある鳥居の場所が、現在の神門のあたりになります。日前神宮・國懸神宮と竈山神社と伊太祁曽神社の三社を詣でる三社参りが古くから盛んであり、多くの方が参拝に足を運んでいます。

竈山墓

明治9年(1876)に宮内省(現宮内庁)によって、竈山墓という名称で神武天皇の兄である彦五瀬命の陵墓に治定されました。和歌山県には、約1,700基の古墳がありますが、宮内庁が管理する陵墓はこの古墳だけです。

遺跡としては竈山神社古墳と呼ばれており、円墳であると考えられています。このように、陵墓等の名称と遺跡の名称は異なっており、代表的な例として、仁徳天皇陵は百舌鳥耳原中陵と大仙古墳、応神天皇陵は恵我藻伏岡陵と誉田御廟山古墳と呼ばれています。『古事記』(712年)には、「彦五瀬命は稲飯命や神武天皇と共に、大和乎定のために日向を出発し、瀬戸内海を通り白肩津(今の東大阪付近か?)に上陸しましたが、敵の矢にあたり負傷してしまいました。その後、南の方へ回り込み大和を目指す途中に傷が悪化したため男之水門(和歌山市小野町にある水門吹上神社付近か?)で亡くなり、現在の和田竈山の地に葬られた」と記述されています。



竈山墓

静火神社

『延喜式』にその名が記されていますが、創祀の時期は不明です。祭神は『鵜飼氏文書』によれば火結神とされています。式内社の社格は名神大社(官幣大社)であり、『延喜式』が作られた頃は竈山神社よりも社格は上でした。もともとは石碑のある和田静火の地に鎮座していましたが、社殿が水に浸かったため、近くの前山(天霧山)に移されました。

近代社格制度のもとで、明治6年(1873)に村社に定められましたが、全国的に神社合祀が進められた同42年(1909)に、竈山神社末社稲荷神社に合祀されました。昭和25年(1950)に地域住民の願いにより分祀され、再び前山(天霧山)に社殿を造営し、遷座されました。社殿は平成13年(2001)に修築されています。



静火神社 旧跡



静火神社 社殿

歩いて知るきのくに歴史探訪 ～竈山神社と周辺の遺跡を巡る～ 古絵図で歩く竈山神社周辺文化財マップ

平成25年(2013)10月26日発行
発行：公益財団法人和歌山県文化財センター(〒640-8404 和歌山市湊字新堤内坪571番1)

*この見学会は、平成25年度文化庁文化芸術振興費(地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業)の補助金を受けて実施しています。

坂田遺跡の発掘調査 ㉔



空中写真 (北から)



石積み井戸



土鍾



勾玉未製品

坂田遺跡は竈山神社の北側に位置し、東西方向に通る県道三田三葛線の道路改良工事に伴う発掘調査が行われました。発掘調査は、平成 21 年 (2009) 11 月 12 日から平成 22 年 (2010) 3 月 12 日までの約 4 ヶ月間で約 2,000㎡の調査を行いました。

調査地の東側が西側よりも若干高くなっており、微高地である東側の方に、遺構が集中して見られました。そこでは、中世のものと考えられる遺構が多数確認され、他に古墳時代や古代の遺構も確認されました。西側は、遺構がほとんどなく、永く湿地帯であった可能性が考えられます。

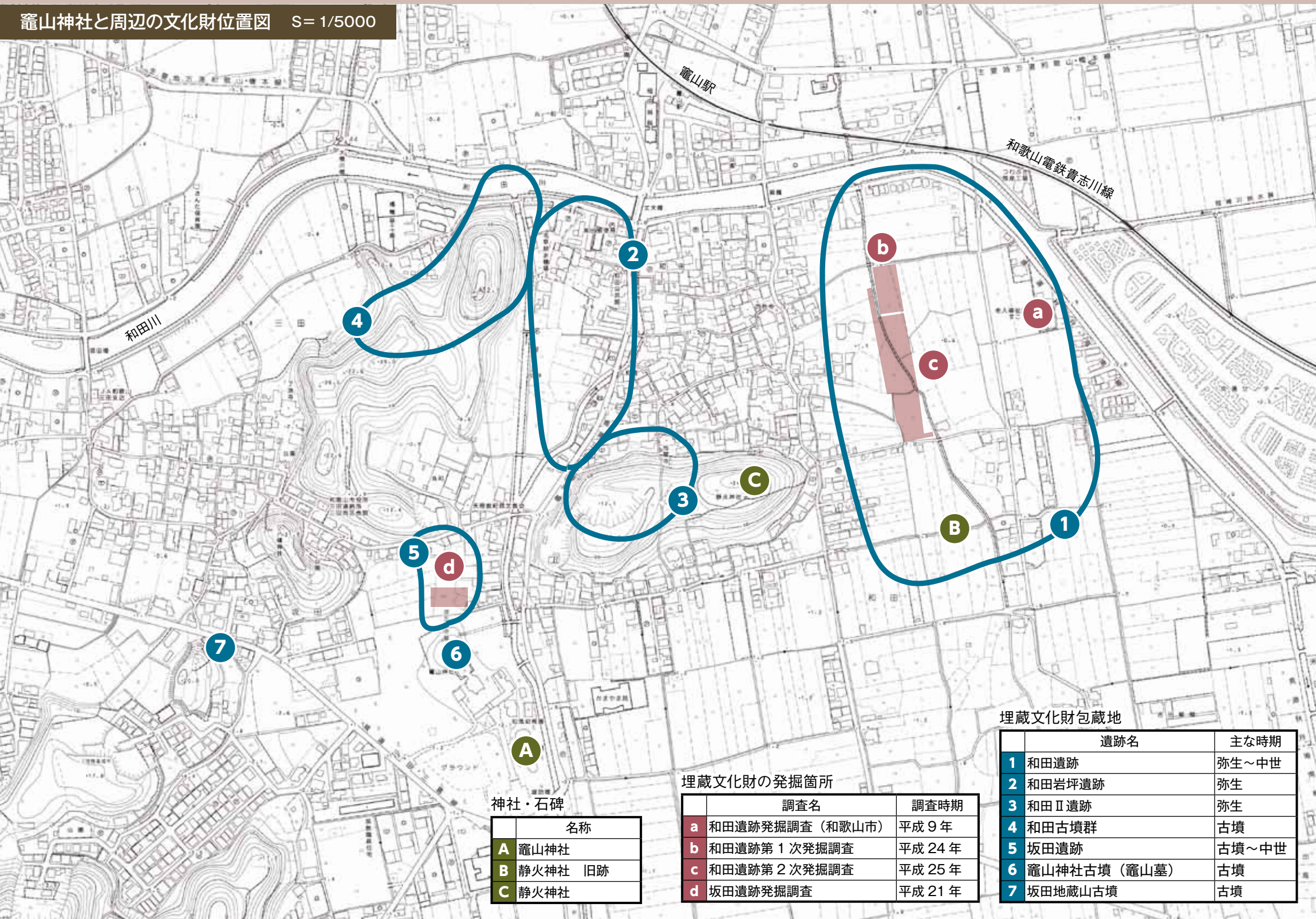
古墳時代のもものでは、井戸と考えられる土坑や掘立柱建物などが確認されており、須恵器、勾玉、滑石製琴柱形石製品、有孔円板などの遺物が、古代のものでは、奈良時代の須恵器や、平安時代の黒色土器などが、中世のものでは、石積み井戸が確認されており、東播系こね鉢、備前播鉢などが出土しています。

この遺跡で特に注目されるのは、滑石製琴柱形石製品が出土していることです。琴柱形石製品の名前の由来は、琴の弦を支える琴柱に形が似ていることからこのように呼ばれています。坂田遺跡で出土したものは、高さ 2.5cm、幅 2.5 cm、厚み 0.7cm の大きさです。四隅には 1mm に満たない細い孔があけられています。琴柱形石製品の用途は正確には分かっていません。しかし、全国の出土例では、古墳の被葬者の頭部付近から出土することが多く、被葬者の性別は女性に限られるそうです。そのため、髪を飾っていたのか、護符のようなお守りであると考えられています。

琴柱形石製品の出土は和歌山県下では 3 例あり、坂田遺跡での出土は 4 例目となります。1 例目は、大正 4 年 (1915) にみなべ町の城山古墳から鏡、銅鏃、鉄剣、多くの玉類などとともに出土しました。〔今は所在が不明となっています。〕2 例目は、昭和 8 年 (1933) に紀の川市の丸山古墳から鉄鉞、鉄鉢、直刀、玉類などとともに出土しました。3 例目は、昭和 51 年～ 54 年 (1976～1979) にかけて発掘調査が行われた、和歌山市の八王子山 8 号墳から鏡、鉄剣、刀子、玉類などとともに出土しました。

琴柱形石製品は古墳から出土することが多いので、周辺に古墳があったのかもしれませんが。坂田遺跡の南には竈山神社古墳、北には和田古墳群、西には坂田地蔵山古墳があるため、それらの古墳との関連性も考えられます。

竈山神社と周辺の文化財位置図 S= 1/5000



和田岩坪遺跡

和田岩坪地区は、かつてより畑地において弥生土器、石鏃、石庖丁、須恵器などが採取されており、付近に集落があったことが推定される場所でした。昭和 31 年 (1956) に名草川の改良工事が始まり、竈山墓の前から和田川本流に注ぐ流水路が開削された際に多くの土器が発見されました。また、弥生時代の木製井戸が 2 基確認されており、底部から土鍾や壺が出土しました。付近からはカキ、ハマグリを中心に、サザエ、アサリなどの貝殻が混じった層が確認されており、この付近が入浜の海浜であり、土鍾などの漁撈具が出土していることから、漁業を営む集落があった事が推定されます。

以上の内容を、郷土史家の田中敬忠氏が『和歌山春秋』に発表されています。この中では和田川遺跡として記述されています。〔記述された立地を埋蔵文化財包蔵地所在地図で見ると、和田岩坪遺跡の事ではないかと考えられます。〕

三田地区の歴史

三田地区の丘陵部を除いた多くの場所は、縄文時代には海であったと考えられます。弥生時代になると、和田遺跡と和田岩坪遺跡で遺構や遺物が確認されることから、この頃には陸地化されており、人々が居住していたと考えられます。古墳時代には、和田古墳群や竈山神社古墳、坂田地蔵山古墳が独立丘陵上にみられます。古代には桑里制が敷かれ、航空写真を見ると北 10 度西に傾いた桑里地割の跡がよく残っているのがわかります。坂田には塩田という小字名があり、この地は江戸時代初期まで塩浜として利用されていたことが『紀伊続風土記』(江戸時代後期)に記されており、和田川を逆流する海水がこの場所まで来ていたことがわかります。

明治に入ってからは、メリヤスや綿ネル(紀州ネル)が盛んとなりました。また、ニット機械を製造する鳥精機製作所や、多くの繊維関係のメーカーが、立地していることが地図からもわかります。

和田遺跡の発掘調査 ㉕・㉖



第 1 次調査 空中写真 (北から)



第 2 次調査 空中写真 (北から)

和田遺跡は竈山神社の北東に位置し、今までに 3 回の発掘調査が行われています。和歌山市文化体育振興事業団が平成 9 年に和田遺跡の北東端にあたる場所で発掘調査を行っています。中世のイネの痕跡が確認され、水田跡であったと判断されています。当センターでは、和田遺跡の範囲の中央にあたる場所で、県道秋月海南線の道路改良工事に伴う発掘調査を、平成 24 年度 (第 1 次調査) と平成 25 年度 (第 2 次調査) の 2 次にわたり行いました。

第 1 次調査は、平成 24 年 (2012) 10 月 18 日から平成 25 年 (2013) 2 月 28 日までの約 4 ヶ月間で約 1,500㎡の発掘調査を行い、弥生時代、古墳時代、平安時代～鎌倉時代の遺構を確認しました。弥生時代のもものでは、素掘りの井戸や土坑が確認されており、土坑からはミニチュア土器が出土しています。古墳時代のもものでは、流路と複数の土坑が確認されています。土坑からは土師器の甕や高杯が出土しています。流路は調査区の北西から南側にかけて確認され、川岸部分からは弥生時代中期～古墳時代前期にかけての土器がまとまって出土し、砥石や小型の石斧なども出土しています。平安時代～鎌倉時代のもものでは、四隅に杭を打ち四面に板材を入れた構造の木枠の井戸が確認されています。井戸の中には 30cm 大の石が複数入っており、その下からは白い石を入れた土師器の皿が出土しました。これは、井戸を廃棄する際に、何らかの祭祀を行った可能性が考えられます。

第 2 次調査は、平成 25 年 (2013) 4 月 18 日から 9 月 8 日までの約 5 ヶ月間で約 4,500㎡の発掘調査を行い、弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺構を確認しました。

弥生時代のもものでは、南北方向に流れる流路や土器を廃棄した土坑、素掘りの井戸を確認しました。遺物は、壺、甕、高杯などの日常使用されていた土器や、石庖丁が出土しました。古墳時代のもものでは、東西方向に流れる流路や井戸、土坑、掘立柱建物を確認しました。遺物は、土坑から須恵器、土師器、ミニチュア土器が出土しています。他にも土鍾、紡錘車、管玉なども出土しました。第 1 次調査の流路と、第 2 次調査の東西方向の流路は同じ遺構と考えられ、北側に和田川が流れていることから、和田川の旧河川であった可能性が考えられます。奈良時代のもものでは、木製の井筒を設置した井戸が確認されており、井戸の中からは葉壺や甕などが出土しました。

第 1 次・第 2 次の調査結果、調査地の北東側と南西側には、旧河川の周りに微高地が広がり、人々が生活を営んでいた痕跡が確認されました。



第 1 次調査 流路の川岸 土器出土状況



第 2 次調査 木製の井筒を設置した井戸